説教：「臆することなく大胆に」

聖書：使徒言行録４章２３－３１節

＜主が導かれた再会の時＞

今お一人お一人のお顔を拝見しながら、ここで再び礼拝をささげられる幸せを、心から主なる神様に感謝しています。

この地で皆さんと共に歩んだ日々。私たちは本当に多くのことを分かち合ってきました。共に主を賛美しました。共に祈りを合わせました。時に教会の色々な課題に直面することもありましたし、またそれぞれの生活の中で涙を流すこともありました。そしてそういう時に私たちは、いつも共に跪き、ただ主のみを見上げて歩んできました。その日々を、私は今でも新鮮に、また深い感謝をもって思い起こしています。

宮崎、長崎と離れていても、私たち夫婦はこの教会のことを覚えていつも祈ってきました。そして今日、この講壇に再び立たせていただいています。こうして皆さんと礼拝ができること。私にとっては大きな励ましです。

＜ペンテコステは繰り返し起こっている＞

さて、今朝お読みした箇所は「第２のペンテコステ」と呼ばれる箇所です。「第１のペンテコステ」は、同じ使徒言行録の第２章１節から１３節の物語、よくペンテコステ礼拝で読まれる箇所です。つまりここから分かるのは、「ペンテコステの出来事は繰り返し起こっている」ということです。

例えば、使徒言行録の第２章を開いてみてください。聖霊が注がれた弟子たちは４節、「すると、一同（これが弟子たちのことです）は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした。」とあります。そして彼らが話し出した「内容」というのが、１１節で次のように言われています。「彼らがわたしたちの言葉で***神の偉大な業を語っている***のを聞こうとは。」つまり、聖霊が注がれた弟子たちは「神様の偉大な業」、もう少し具体的に言えば、イエス様の十字架と復活において示された「神様の救いの御業」を、彼らは語り出したのです。

実はこれと同じことが、今朝お読みした箇所にも出てきます。第４章の３１節です。「祈りが終わると、一同の集まっていた場所が揺れ動き、皆、***聖霊に満たされて、大胆に神の言葉を語りだした。***」ここで言われている「神の言葉」というのも、先程の第２章で言われていた「神様の偉大な業」、つまり「イエス様の救いの御業」です。神様はこのようにして、イエス様の弟子たちが神様の言葉、神様の偉大な業を大胆に語れるように、ペンテコステの出来事を繰り返し起こしてくださり、繰り返し新

しい励ましを与えてくださるのです。

でもこれは、ただ２千年前だけのお話ではありません。現代を生きる私たちにも、まさに起こっていることです。実際こうして礼拝堂を見渡しますと、当時と変わらない懐かしい面々に胸が熱くなります。と同時に、嬉しい出会いもあります。それは、私たち夫婦が去った後、新しくこの教会へと導かれた方々、今この席に連なっておられる新しい兄弟姉妹方の姿です。人が入れ替わり、時代が移り変わっても、主を礼拝する祈りのバトンがこうして確かに受け継がれている。これこそが、ペンテコステの出来事がこの教会でも繰り返し起こっている、確かな証拠です。

それだけではありません。大変恐縮ながら、この教会に聖霊の風が吹いたその実りが、この私自身です。この教会は私にとって、伝道者としての原点です。この地で皆さんと共に歩み、共に主を賛美し、共に祈っていた「あの日々の中」で私は、イエス様から一つの声を聞きました。「いつまで悩んでいる。いつまで迷っている。私の言葉を伝えるために、一生をささげなさい！」伝道への召命です。その思いが、この教会で強く固められていきました。私が伝道者への道を志した場所。献身へと押し出された場所。それがまさに、この教会においてです。こうやって一人の人間がイエス様からの招きを受ける。そして伝道者としての歩みを始めるというのは、私個人の、熱意や決意だけでできることでは決してありません。毎週の礼拝の中で、また祈祷会の中で、また様々な会の中で、皆さんが心を一つにして主に祈り、主の愛をこの教会に満たし続けてくださったからこそ、その豊かな土壌から、私の献身の思いは聖霊によって強められていったのです。「私」という存在が、今ここに立っています。皆さんの前で、こうして御言葉を語らせていただいています。つまりこれ自体が、この教会に聖霊が繰り返し働いておられる、その何よりの証拠なのです。

＜祈りの大切さ＞

またこの３１節から私たちは、「祈りの大切さ」も教えられます。弟子たちはこの時「祈って」いました。２４節にもこうあります。「これを聞いた人たちは心を一つにし、***神に向かって声をあげて言った。***」彼らは「祈って」いたのです。

どうして祈ったのかと言いますと、それは教会の仲間たちからある報告を受けたからです。２３節にこうあります。「さて二人は、釈放されると仲間のところへ行き、祭司長たちや長老たちの言ったことを残らず話した。」この「二人」というのは、ペトロとヨハネです。このペトロとヨハネは第３章において、足の不自由な人を癒し、そしてイエス様の救いを宣べ伝えていました。「他の誰によっても救いは得られない。私たちを救えるのは、ただイエス様だけである」と、「伝道」していたのです。でもそこで２人は、祭司たちや神殿守衛長たちに捕らえられて、裁判にかけられてしまいます。彼らから

「これ以上、イエスの名によって話したり教えたりするな」と脅されました。でも２人はその脅しに少しも屈さず、「私たちは、自分たちが見たことや聞いたことを、話さないではいられません」と言って、この裁判所の命令を拒否したのです。このようにして自分たちが迫害を受けたこと、また祭司長たちや長老たちの言ったことを、ペトロとヨハネは教会の仲間たちに報告しました。その報告を受けて弟子たちは、「心を一つにし、神に向かって声をあげ」た。つまり「祈った」のです。

弟子たちはここで、伝道が難しい中、まず自分たちにできること、力量や状況などを判断して、「じゃあ自分たちには何ができるだろうか？」と考えたわけではありません。彼らはまず「祈った」のです。伝道の難しさ、その現実に諦めるのではなくて、彼らはまず祈り、神様に助けを求めました。

これは私たちも、しっかりと受け止めなければなりません。私たちも今、伝道の難しさを抱えています。例えば、私たちにはこういうことがないでしょうか？「私が教会に行くことは、家族も快く送り出してくれる。でも、礼拝には一緒に来てくれない。」他にも、「礼拝に来てみない？」と誘うと、「そこまではいい」と断られてしまうこともあります。このように、家族や友人に伝道することの難しさ、この地域に伝道することの難しさを、それぞれが大なり小なり痛感しているはずです。でもそれは、今に始まったことではありません。最初の時、初代教会の時からそうなのです！先程もお話したとおり、弟子たちが「伝道」したことによって、彼らは取り調べを受けました。脅しも受けました。命を落とした者たちもいます。でもそこで彼らは祈り、神様に助けを求めたのです。

祈りなしに、神様の助けなしに、困難の中「伝道が進んでいく」ということはありえません。でもこれは逆に考えれば、祈ることによってこそ伝道は進んでいくということです。私たちは「伝道」と言うとすぐに、「自分に、自分たちに何ができるか？」をまず考えます。そして、「力もなく、これと言って目立った能力や賜物もない自分には何もできない。小さくされた自分たちには何もできない」と考えるのではないでしょうか？他にも、「自分はもう高齢になり、できることなど何もありません」と感じている人も、おられるかもしれません。でもそれは間違いです。私たちには、祈ることができます。たとえベッドに横たわることしかできなくなったとしても、祈りの務めは担うことができます。「自分にはもう何もできない」とか、「自分には関係がない」と思って祈ることすらしないならば、伝道の力は削がれていくのです。そうではなくて、まさに「心を一つにして」、皆で、伝道のために「祈って」いくこと。それがここで求められているのです。

例えば週の半ば、この教会でも、聖書の学びと***祈りの会***の時を持っているはずです。一人でも多くの方がこの会に出席し、皆で心を一つにして、伝道のことを祈ってください。またある教会では毎日時間を決めて、例えば毎晩９時に、それぞれの場所で、伝道のことを覚えて祈っているという教会もあります。こういう「祈り」こそ、教会の一番大切な力なのです。

＜伝道は教会で担う＞

また私たちは、２３節と２４節の言葉からもう一つ気付かされることがあります。２３節以下。「さて二人は、釈放されると仲間のところへ行き、祭司長たちや長老たちの言ったことを***残らず話した。***これを聞いた人たちは心を一つにし、神に向かって声をあげて言った。」ペトロとヨハネは、自分たちの受けた迫害がどういうものであったか、教会の仲間たちに全て報告しました。そしてその報告を受けた者たちが、心を一つにして祈ったのです。

ここで私たちは気付かされます。それは、「伝道」というのは「１人で行うものではない」ということです。私たちはそれぞれの家庭や職場などで、一人一人が「伝道者」として遣わされています。おそらく皆さんもそういう意識をどこかで持っていて、家族や友人たちに、教会や聖書のことを何とか伝えようとしていると思います。でもどうしても伝道が上手くいかない・・・。私たちはそのことを、１人で抱え込んでしまってはいないでしょうか？「自分で何とかしなければならない」。そうやって孤軍奮闘している人が、とても多いように思うのです。

でもここでペトロとヨハネは、自分たちに起こった困難を、仲間たちに全て話しています。これはつまり、伝道の業を「教会全体で担っている」ということです。彼らは伝道の難しさを、自分たちで、自分一人で、解決しようとはしていません。教会の仲間たちを信頼し、それらを報告し、「伝道をどうしようか？」と話しているのです。そして彼らの話を受けて教会も、「教会全体としてどうしようか？」と、彼らは一緒になって考えているのです。つまり「伝道」というのは、こうやって「教会全体で行うものだ」ということが、ここに示されています。一人一人が抱えている伝道の難しさ、その報告を受けて、その課題を教会全体で担っていく。これが、教会の「伝道」なのです。

＜大胆に御言葉を語る＞

このようにして仲間たちの迫害の報告を受けて、教会は心を一つにし、皆で祈りを合わせました。その祈りの内容は、２４節から３０節にかけて記されていますけれども、今朝は特に２９節と３０節に注目したいと思います。困難な状況が教会に襲ってきている時、彼らが真っ先に祈ったのは「大胆に、御言葉を語ることができますように」という祈りです。果たして私たちだったらどう祈るでしょう？おそらく、「この困難が１日でも早く過ぎ去りますように」とか、「この困難から自分が守られますように」と、祈り求めるのではないかと思います。でも弟子たちは「そこでこそかえって臆することなく大胆に、御言葉を語る者にならせてほしい」と祈ったのです。

なぜこういう祈りできたのか、私たちは不思議に思います。でもこれは、困難に直面しても心が折

れたり揺らいだりしない「鋼のメンタル」、強い精神力が、彼らにあったからではありません。そうではなくて、彼らは「信頼」していたのです。どんなに困難なことが目の前で起こっているとしても、それらはなお神様の御支配のもとにあること。神様すらもう手をつけられない、そういう状況では決してないということ。彼らは神様を「信頼」していたのです。

実際イエス様が十字架に架けられた時、彼らの目には、まるで人間の罪が勝利したかのように見えました。でもそうではなかったことを、弟子たちはその目で見たのです。神様は人々の罪さえも用いて、救いの御計画を進められていました。しかもイエス様の復活によって人々の罪と死は打ち砕かれ、罪の赦しと永遠の命とが与えられた。あの時、神様の御支配こそが「勝利」したのです。そのイエス様は、今は天に昇られて、自分たちを恵みの御支配の中で生かしてくださっている。生かし続けてくださっている。「そうであれば、今どんなに困難なことが起こっているとしても、それらはなお神様のご支配のもとにある。神様すらももう手をつけられないという状況ではない。だったら臆することなく大胆に御言葉を語らせてください！」と、尻込みせずに祈れたのでしょう。実際「大胆に神の言葉を語りだした」の「大胆」という元々の言葉には、「信頼」という意味が含まれています。弟子たちは、自分たちと共にいてくださり、共にお働きくださるイエス様を「信頼」していたからこそ、これほど大胆に、彼らはイエス様を証ししていたのです。

＜聖霊に励まされて＞

主なる神様は、この「教会の祈り」に応えてくださいました。それが３１節です。「祈りが終わると、一同の集まっていた場所が揺れ動き、皆、聖霊に満たされて、大胆に神の言葉を語りだした。」教会の祈りに応え神様が、あの「第１のペンテコステ」の日のような出来事を与えてくださいました。教会に伝道の困難が迫っている中、神様はあのペンテコステの出来事をもう一度起こしてくださったのです。そうやって教会の祈りに応えてくださり、また新しい励ましを与えてくださったのです。

そしてこの新しい励ましは、現代を生きる私たちにも繰り返し起こっています。それが、まさにこの「礼拝」です。この礼拝において私たちは毎週、神様の御支配、イエス様の十字架と復活による救いの出来事を聞いています。また聖餐によって、それを喜び祝います。そうやって神様は礼拝のたびごとに聖霊の力を注ぎ、私たちを御言葉の喜びへと向かわせ、また新たに励ましてくださるのです。そのためにこそ神様は、私たちを礼拝へと招き続けてくださるのです。

だからこそ私たちは、神様に信頼し、伝道が益々進んでいくことを祈り求めていきたいと思います。もちろん、私たちの身の周りにも伝道の難しさがあります。理解されないこともあります。伝道がほとんど進んでいない、いやむしろ、後退していってしまっているような現実もあるかもしれません。

でもそういう中で私たちは、私たちのこの状況が神様から見放されてしまったわけでも、また、神様の手に負えない状況になってしまっているわけでもない。そう「信じること」が、今求められているのです。

諦めるのではなくて、悲嘆に暮れるのでもなくて、神様から与えられた信仰と希望とによって、私たちは今心を一つにし、神様に「祈って」いきたいと思います。祈りをいたしましょう。

＜祈祷＞

父・子・聖霊なる神様。今朝も御言葉をとおしてあなたの思いをお聞かせくださり、ありがとうございます。

あなたは、私たちが伝道の難しさを覚える時も私たちと共にいてくださり、あなたの御手から零れ落ちてしまったわけではないことに気付かせてくださいました。また天地の全てをお造りになり、それらを御支配くださっているあなたが、この教会をも御支配してくださっていることに気付かせてくださいました。ありがとうございます。どうか私たちそのあなたの思いを、御言葉と聖餐とをとおしてしっかりと受け止めることができますように。またそのあなたに全幅の信頼を寄せて、折が良くても悪くても、一人一人が、御言葉を臆することなく大胆に宣べ伝えてゆくことができますように。あなたがお委ねくださっているこの伝道の御業を、皆で心を一つにし、祈り、また教会全体で担ってゆくことができますように、私たちを聖霊で満たしてください。また御心ならば、伝道の実りを豊かにお与えくださいますようお願いをいたします。

主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン